

自閉症児の語用論的機能の特徴に関する発達心理学的研究 -指示詞コ・ソ・アからの検討-

著者	伊藤 恵子
号	11
学位授与番号	80
URL	http://hdl.handle.net/10097/37110

伊 藤 恵 子

学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	教博 第 80 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 総合教育科学専攻
学 位 論 文 題 目	自閉症児の語用論的機能の特徴に関する発達心理学的研究 ー指示詞コ・ソ・アからの検討ー
論文審査委員	(主査) 助教授 田 中 真 理 教 授 細 川 徹 教 授 川 住 隆 一

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、指示詞コ・ソ・ア（これ/それ/あれ、こっち/そっち/あっち等）の表出・理解の面から、自閉症児の語用論的機能の具体的な特徴を把握し、その特徴に関連する要因を明らかにしたうえで、自閉症児の語用論的機能の特徴に対する支援として活用しうる資料を提出することを目指したものである。

第Ⅰ部においては指示詞コ・ソ・アの表出面から、第Ⅱ部においては理解面からみた自閉症児の語用論的機能の特徴に関しての検討を行なった。第Ⅲ部では、これらの特徴をもたらし背景となる要因の検討を行なった。終章において、第Ⅲ部までの結果をふまえ、自閉症児における語用論的機能の特徴に応じた支援への提言を行なった。

序章では、自閉症児のコミュニケーションに関連する先行研究を概観し、本研究の目的を、(1) 指示詞コ・ソ・アの獲得からみた自閉症児の語用論的機能に関する具体的な特徴の把握、(2) 自閉症児の語用論的機能の特徴に関連が予想される、他者視点取得能力、知的能力、非言語的手がかりを活用する社会認知的スキルといった要因の検討、(3) (1) および (2) の結果をふまえて、自閉症児における語用論的機能の特徴に応じた支援への提言、と設定した。

第 1 章では、定型発達児における指示詞獲得に関する先行研究を概観した。その結果、従来の

研究の多くは、年齢に伴う認知発達に依存して指示詞が獲得されるとの見解を取っていた。一方で、周囲のおとなの指示詞発話量が子どもの指示詞獲得に影響を与えるとの研究結果もみられた。しかし、日本語の指示詞獲得に関する研究は少なく、これら指示詞の獲得がどのような要因と関連が深いか明瞭でないことも同時に示された。第2章では、自閉症児の指示詞獲得の特徴を検討する前提として、定型発達児における指示詞獲得に関する基礎的な資料を得る目的で、日本語の指示詞の発達的な出現順序と、その出現順序に関連する要因を探った。具体的には、定型発達児の縦断的発言データから、幼児初期の3組の母子自由遊び場面における指示詞コ・ソ・アの出現状況を検討した。その結果、子どもの年齢に伴う認知発達に依存して、コ系・ア系・ソ系の順に指示詞が出現するといった、従来の多くの研究が主張してきた見解が必ずしも妥当ではないという可能性が示唆された。また、養育者の指示詞発話量と子どもの指示詞出現順序との明確な対応も認められなかった。第3章では、実際の自由遊び場面での映像をもとに、定型発達児との比較を通し、自閉症児における指示詞表出の特徴に関して、コ系・ソ系・ア系ごとの指示詞表出頻度の検討を行なった。同時に指示詞を表出する際、どの程度の非言語的手がかりを聞き手に与えているかという観点から、かれらの語用論的機能における特徴を検討した。その結果、自閉症児は定型発達児に比べ、ソ系の指示詞表出が有意に少なく、コ系指示詞表出が有意に多かった。さらに、自閉症児は話し手となった場合、身振り指さしといった非言語的手がかりを聞き手に与えようとする行動が乏しかった。

第4章では、定型発達児と成人に対して、指示詞理解実験を実施し、指示詞コ・ソ・アの理解における発達的变化を検討した。その結果、5歳以上の対象児においては、成人の反応と有意差が認められなくなったと同時に、4歳以前の対象児における反応と質的な違いが見出された。一方、低年齢の対象にではなく、7歳児や成人といった年齢の高い対象に、視点の変換に失敗する反応がみられたことや、成人においても「ソ」と「ア」の使い分けに混同が多くみられた。これらのことから、指示詞コ・ソ・アの理解に関しても表出と同様、従来から言われてきた年齢に伴う認知発達と関連が深いという説明には疑問の余地が示された。むしろこれら指示詞の理解に関しては、認知的な要因以外の別な要因の関与が深くかかわっている可能性が示唆された。第5章では、第4章の理解実験に基づき、指示詞理解から自閉症児の語用論的機能の特徴を検討した。その結果、自閉症児は定型発達児に比べ、指示詞使い分けの基準を早い時期に獲得する者が多いものの、その基準はかれら独自の基準である場合が多かった。同時に、かれらは視線や指さしを指示対象特定の手がかりとして活用することが、定型発達児に比べて乏しかった。

第6章では、先行研究等から指示詞理解との関連が予想された他者視点取得能力および知的能力と、自閉症児の指示詞理解との関連を検討した。その結果、このふたつの要因のいずれも、自閉症児の指示詞理解実験結果の説明を可能にする知見を得るには至らなかった。第7章では、非

言語的手がかりを読み取る能力といった社会認知的スキルと、自閉症児の指示詞理解との関連を検討した。その結果、定型発達者が実験者の視線を指示対象特定の有力な手がかりとして活用していたのに対し、自閉症児では実験者の視線を手がかりとして活用していない者が多く見出され、指示詞理解実験結果と社会認知的スキルとの関連が示唆された。自閉症児が実験者の視線を指示対象特定の有力な手がかりとして活用しないのは、実験者へ自らの視線を向けないためではなく、ほとんどの自閉症児が実験者へ視線を向けつつも、実験者の視線を指示対象特定の手がかりとして活用できなかったのである。その理由の一つは、話者の視線方向特定に失敗したためと思われる。二つ目は、話者の視線あるいは指さしが指示対象特定の手がかりを与えているということを理解できないためと考えられた。このことは、指示詞の指示対象特定に限らず、言語獲得一般にも共通することであり、話者の視線や指さしからその伝達意図を推測し、ことばの指示対象を特定できなければ、そのことばの正確な意味や使用法を獲得することを困難にする。

終章では、ここまでの結果をふまえ、自閉症児の語用論的機能の特徴に応じた支援に関して提言を行なった。具体的には、自閉症児の語用論的機能の特徴に応じた支援を考えていくうえで、まずその自閉症児が、前途のどの理由で非言語的手がかりの読み取りに困難を示しているかを特定することの必要性である。この特定を行ったうえで、それぞれの自閉症児の状態に応じた対応が求められる。とくに、話者の視線あるいは指さしが指示対象特定の手がかりを与えていることを理解できない者に対しては、他者との相互主観的な経験を保障していくことによって他者理解を促し、共同注意の成立を助けることが、重要であると考えられた。その場に即した適切な言語の獲得といった表層的行動を扱うだけでなく、言語獲得の基礎になる社会性の育成に重点的に働きかけることの重要性が導かれた。

論文審査の結果の要旨

自閉症児の言語コミュニケーションの特異性は、自閉性障害の中核的な症状のひとつであり、語用論的機能の特異性は前言語的なレベルにおいても言語表出以後においても認められることが指摘されている。しかしながら、わが国では自治体における乳幼児健康診査において、言語面のなかでも理解の側面よりも表出言語の数など量的な側面に重点をおいたスクリーニングが行われているため、自閉症児にみられる特徴に応じた適切な支援が見落とされる傾向にあるのが現状である。

本論文では、自閉症児を対象に、話し手と聞き手の関係性や発話文脈など環境とのかかわりを鮮明に映し出す指示詞獲得の点から、理解面及び表出面において語用論的機能の特徴を明らかに

し、これらの特徴に関連した要因として知能指数・他者視点取得能力・社会的相互作用スキルを検討し、上記のような現状に対し問題提起を行うとともに、自閉症児の語用論的機能の特徴に対する新たな支援のあり方を提案したものである。

本研究の優れた点として、大きく以下の三点を指摘できる。第一は、自閉症児の語用論的特徴について従来の研究の多くが体系的な実証性に欠けており、臨床的経験や一事例報告などに基づくものである。なかでも指示詞については皆無であったが、指示詞の表出・理解の両側面から体系的に研究し、発達の様相に関し新たな知見を提供した点である。第二は、指示詞表出および理解における特徴は、自閉症児の対人志向性の乏しさが言語面に反映された結果であり、また社会的相互作用スキルや他者との共同注意の在り様との関連を示唆し、自閉症の情動説を支持する新たな見解を提供した点である。第三は、自閉症児の語用論的特徴に応じた支援のあり方として、自他の同型性と個別性の理解という点から、他者との相互主観的な経験を保障していくことが重要である、という新たな視点を導入した点である。

しかしながら、①自閉症児の語用論的特徴を把握するには、指示詞獲得の側面からのみならず、提供情報の適切性・相手の話題への反応・新旧情報の区別といった多様な側面から検討すること、②社会性の特徴という点では自閉症と共通性の高いアスペルガー障害児をも対象として、語用論的機能の特徴に対する支援のあり方の共通性と差異性を明確にすること、③自閉症は発達障害でありその状態像が年齢とともに変化していくことをふまえ縦断的研究を行うこと、については今後の重要な検討課題として残されている。

このような課題もあるが、本論文は、体系的な実証的データのもとに自閉症児の語用論的特徴の解明とそれをふまえた支援のあり方について新たな知見を提供しており、この研究領域に大きなインパクトを与えるものであると高く評価できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。